

## 目には見えないが、肝要なことを感じ取ろう

会長 近藤 英治

冬至を迎えると心がウキウキするようになったのはいつの頃からでしょう。子どもの頃は、冬は暗く寂しい季節と思っていました。しかし、冬至を境に日脚は徐々に伸び、やがて必ず春が訪れることを深く知るようになりました。今、私たちの目に映るのは薄暗い朝や裸木の風景ですが、冬至を過ぎるとふとした瞬間に春の芽吹きや新緑が確実に近づいていると感ずることがあり、そのたびに心が躍るのです。

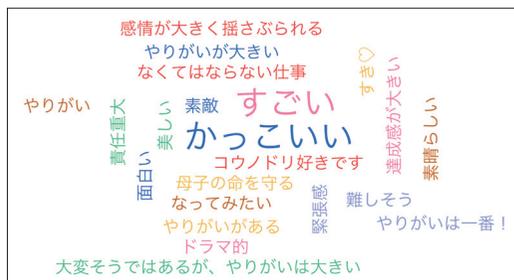


さて、同窓会会員の皆様におかれましては、少子高齢化に加え人手不足や物価高騰などの厳しい社会情勢も相まって、心休まることのない日々をお過ごしではないかと思います。

大学および関係病院も人手不足の対応に呻吟する毎日で、闇夜を歩むような不安を感じる医局員もいることでしょう。しかし、幸いなことに私たちには目標があり、なすべきことがあります。人手不足を理由に逡巡し後退ばかり考えては衰退や消滅は避けられません。熊本の産婦人科医療の未来への礎は人材育成にあります。そこで、学生・若手医師の勧誘、中堅・ベテラン医師の UIJ ターン、関係病院の集約化など、人員増加に向けた取り組みを推進すると同時に、医局員一人ひとりの成長を願い、より高いレベルでの診療の実践を促し、能う限り大学院進学や国内外への臨床・研究留学を応援しています。「艱難（かんなん）汝を玉にす」は、中学生時に「ブラザー・オーラス 人とことば」という書を通して出会ったことわざで、爾来、近き将来を信じて逆境を楽しもうという気持ちで挑戦し続け今に至ります。人員や研究費が充足していなければ、ないなりにどうすれば目標を達成できるかを考え算段するのも得難い経験です。嬉しいことに、最近、時間や勤務環境に制約があるなか、自ら新たなことに挑戦する医局員の姿が多く見られるようになってきたと感じます。皆さんの日々の地道な努力の積み重ねが、いつの日か家庭や社会において新たな有形・無形の価値を創出し、社会貢献に繋がると固く信じております。

2023年を振り返ると、大谷翔平選手と阪神タイガースの大ファンである私にとって嬉しい出来事が重なりました。漫画のような展開の WBC 優勝、阪神タイガースの38年ぶりの日本一に大いに励まされた1年でした。侍ジャパンと阪神の両者に共通していたのはチーム一人ひとりが目標のために自分の役割を全うしたことだったと思います。ここ熊本でも、産婦人科診療に携わる一人ひとりが「よりよい熊本を次代に繋ぐ」という共通の目標に向かって一生懸命役割を果たそうとしてくださっていることが強く感じられ、大変心強く思います。先日、医学部3年生の講義があり、産科の印象をリアルタイムに回答（Word Clouds, Mentimeter）してもらったところ、講義前は「大変」「忙しい」という単語が目立ったのですが、講義後は「かっこいい」「やりがい大きい」などポジティブな回答（右図）が大半を占め、大変嬉しく思いました。目に見えないことが心で見えるようになるだけで人生は変わります。産婦人科医が多くの学生や若い医師から憧れられるような存在になるよう、引き続きワンチームで一丸となり山積する課題に取り組みたいと考えております。笑顔あふれる未来を創るため、2024年も変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

Q: 産科医の仕事内容に対する印象は？



(2023年冬至)

(医学部3年生 産科婦人科系統講義に於いて)